8/27 朝日

安保法案ノー 道端での訴え

無職　（兵庫県　76）

六甲山のすそ野を通る道路、山手幹線。兵庫県芦屋市の区間は大半が阪神大震災の後に開通した。その道路脇で先日、一人の男性がいすに座っていた。年齢は私と同じか、少し上。A4サイズより少し大きな白い紙に手書きで「あべ内閣は許さない」。それを板に貼り付けたプラカードを掲げ、通る車に向けていた。言いようもない感動を覚えた。安倍内閣が成立を目指す安全保障関連法案に対して矢も盾もたまらず道端に座り、思いを示しているのだと思った。

製鉄会社社員だった私は、プラント建設商談のため中南米、中近東、東南アジアを駆け回った。イラン・イラク戦争時にはイランのテヘランで空爆にも遭った。無事に仕事を終えられたのは、いろいろな国の人に助けられたからだ。私は一度も危害を加えられたことはない。日本は戦争をしないし、戦争に加わることはないと思われていたためではないだろうか。

企業は今後も海外と関わって仕事をしなければならない。もし米国の戦争に日本が協力し、加わろうとするような安保法案が成立した時、今までのように海外で安全に仕事ができるだろうか。企業経営者はどう考えているのだろう。

誰も戦争で死なないために

主婦　（大阪府　40）

昨年、ウクライナ危機の記事にあった武装した人の写真を見て当時5歳の息子が「これは日本なの？」と聞いてきた。外国の出来事だと説明し、日本は憲法9条があって戦争をしないけど、変えようとしている人もいるからこれからは分からないと教えた。「戦争になれば誰が行くの？」と聞くので夫や身近な人の名前を挙げ、その人たちかもしれないと説明した。「ダメ、そんなの絶対にダメ」と言う目に涙が浮かんでいた。

それなら誰かが日本に攻めてきた時や、戦いを止めたい時はどうすればいいかな、と尋ねた。息子は「分かり合えるまでずっと話し合えばいい」と答えた。そして、言った。「僕は誰にも死んでほしくない」と。

あれから約1年半。まさか戦争に加担するような安全保障関連法案が衆院を通過するとは。平和が守られた70年の重さに対し、たった116時間半の審議で議論は尽くされたという与党の主張に恐ろしさを感じた。息子が怒り悲しむ姿を思い返しては、私に出来ることを考える日々だ。新聞投稿はその一つ。ペンは剣より強し。どんな理由があろうとも、子どもたちに武器は持たせない。